

石川さんの思い出（6）

この2年間で石川さんご家族の葬儀に、じつに3回も参列したことになる。いずれも教会での葬儀であり、私にとって初めての「経験」であった。悲しい「別れ」であり、何ともやるせない、複雑な気持ちで参列した。

石川さんのお通夜や葬儀には、できるだけ早めに行き、ご親族の方と話をした。石川さんのことが知りたかったからだ。とくに弟さんとはよく話をした。新宿区の戸山公園（団地）あたりで過ごされたようで、兄弟で遊んだことなどを話してもらった。数年前に調査で戸山団地に行ったこともあり、石川さんが育った地域のことがぼんやりと理解できた。

私が3月31日に退職の辞令をもらってから、研究科・学部の教職員の皆さんにお礼のメールを流した。すると石川さんからすぐに返信が届いた。「先生には、本当にお世話になりました。何度感謝しても感謝し足りません。いろいろと、どうもありがとうございました。」私が退職後はゆっくり仕事をしていきたいと書いたのに対して、「私も、やり残した仕事を進めていこうという立場ですが、スローペースが許されるかどうかは神のみぞ知る、です。」そして「先生の実り多い今後の研究生活を期待しております。どうかくれぐれもお体にはお気をつけておすごしください（病気は私だけで十分です）。またお会いできる日を楽しみにしております。」と結んであった。

石川さんのお通夜と葬儀の際には、このメールのコピーを何度も読み返して、これまで「石川さんの思い出」に書いてきたことを思い出していた。涙が止まらなかったが。

石川さんは学部創設以来、現代社会学科の同僚として一緒に活動してきた。夏のオープンキャンパスで、ともに後悔させない？「公開ゼミ」をやったこと、私が学部長の頃に相談にのってもらったことなど、いろいろと思い出に残ることも多い。

でも、石川さんとは、どうも「しっくり」いかず、それほどの付き合いはなかった。なにかにつけて「プライド」が高く、頑固に自己主張する彼に反発したこともあった。それが2年ほど前から、写真にあるように、彼の研究室によく出入りするようになった。研究室で何回か涙ながらに話す、石川さんの「聞き役」「相談相手」になった。入院してからは、病室などでよく「口喧嘩」しながら話を聞いたりしてきた。

石川さんが私を「頼り」にするようになったのは、私がある新聞報道に抗議したことも影響しているようだ。彼と相談して、抗議の「質問状」を送ったことがある。拙著『災後の新聞』にその顛末をほんの少し紹介してある。彼に拙著を読んでもらい、このことも聞いてみたかった。「石川さんの思い出」はこれにつかない。



(2014年8月11日)